ウラルトゥの神

——天理参考館蔵馬面に関する補論——

The Urartian God

——Supplement on the Bronze Horse Forehead Ornament,

Tenri University Sankokan Museum——

巽 善 信^{*}
TATSUMI Yoshinobu

はじめに

天理参考館には前9世紀末頃に位置付けられるウラルトゥの青銅製馬面が一点（以下館蔵品と略称）、所蔵されている。拙稿ですでに、その年代同定と編年上の位置確認を試み、牛像表現について思うところを述べておいた。⁽¹⁾しかし、そこに描かれている神像に関しては触れずに置いたままなので、本稿で若干の考察を加え、補論としたい。

馬面の形状については拙稿で述べたが、再度確認のため、簡単な説明はしておきたい。現長 24.0 cm、現最大幅 13.8 cm。両サイドがやや外に反った縦長の近似台形をなす馬面で、上端部は破損している。打ち出された2本の稜線が、縁取りされた輪郭に添って同心的に周囲を巡る。文様はすべて毛彫で描かれている。2本の稜線の間には、交差した茎の上下に蕾をつけた文様帯を施しており、さらに1つおきに蕾の内部に斜交線を網状に刻んでいる。このような連続蕾文様帯はベルトや車軸飾などのウラルトゥの他の青銅器にも見受けられ、松笠ではないかとされている。⁽²⁾新アッシリア時代の浮彫に、鳥頭部をもつ有翼精霊が、左手にバケツ風の容器を持ち、右手に持った松笠らしき実で樹に触れようとしている図柄がしばしば描写されている。これはナツメヤンの人工受粉を表わしているとする説がある。西アジアではナツメヤンの人工受粉が盛んに行われていたことは「歴史の父」ヘロドトスにより伝えられている。またナツメヤンの人工受粉に関する項目がバビロニアのハムラビ法典にある程、社会生活に重要な位置を占めていた。アッシリアの影響を受けたのか、ウラルトゥにおいても多用される図柄である。

稜線より内側の中央にも水平に蕾文様帯があり、その上に牡牛の背に立つ神像が描かれているのである（図1参照）。「神は有翼円盤を『背に』して、手に持った弓を前に突き出し、右足を一步前に踏みだした状態に描写されている。有翼円盤の輪の中に身を通

* 天理参考館学芸員
Curator, Tenri University Sankokan Museum

しているのか、跨いでいるのか、表面が錆びていて判然としない⁽³⁾」と、拙稿で述べておいたが、左足部が有翼円盤より前面に出ていることから、背にしていると考えたほうが妥当であろう。ウラルトゥの青銅製品に描かれている神像には、有翼円盤に身を通してあるものもあれば、背にしているものもある。円盤下部には左右に尻尾が見られる。カールした長い髪と髭を有し、角状装飾のある冠を被っている。羽状装飾のあるローブのような衣服を身に纏っているが、踏みだした右足の膝から下は露出している。

神 像

ウラルトゥの神話を研究する上で、数少ない重要な手懸かりの1つに、ヴァン湖岸の岸壁に残された碑文があげられる。そこには征服された諸国の神々も含まれた79の神々の名前と供された犠牲について記載されている。これらの中で、主神となるのはハルディ⁽⁴⁾、ティシェバ⁽⁵⁾、そしてシヴィニの三神(図2参照)である。

ハルディは神の中の神に位置する最高神で、戦いの神である。獅子の上に立った姿で描かれる。ハルディこそがウラルトゥ本来の神と考えられる。ティシェバは雷神で、牡牛の上に立った姿で表現される。そのシンボルは稲妻である。雷神はアッシリアではアダド、ヒッタイトではテシュブ、西方ではハダドが知られており、これらは同一視されている。アダドは暴風や洪水、戦いの神、そして農耕にとって大切な雨の神で、メソポタミア各地で篤く信仰され、各都市に神殿が建てられたという。牡牛の背に立つアダド神はカールした髪と髭をはやし、角状の冠に被り、ベルトには短剣を差し込み、槌⁽⁶⁾を振り回し、あるいは竿を持ち、あるいは牛につなげた皮鎖を持っている姿で描写される。同じく牡牛の上に立つテシュブは右手に斧、左手に稲妻を持った姿で表現される。⁽⁷⁾

図1 青銅製馬面に描かれている神像

同じ雷神でも、地域によりその服装、持物が微妙に異なるものの、共通の起源を持つことは一目瞭然であろう。シヴィニは太陽神で、有翼円盤を支える姿で描かれる。アッシリアの太陽神シャマシュと同一視される。シャマシュは生命を維持し、正義を守る神として、広く崇拜された。⁽⁸⁾ウラルトゥにはこのハルディ、ティシェバ、シヴィニの三神による三位一体の思想があったと思われる。

したがって本資料に描かれている神はティシェバということになる。ところで同じティシェバを描くにも、館蔵品のように有翼円盤を伴う場合と（図1参照）、そうでない場合（図2参照）がある。その差異にどのような意味があるのであろうか。つぎに有翼円盤について少し立ち入る必要があろう。

有翼円盤

有翼円盤は太陽神を表わす。日出とともに暗黒の闇に光が差し込み、この世は照らされるが、日没には再び夜が支配する。昼が今世ならば、夜は他界を、日出が生ならば、日没は死を意味する。太陽の恵みで命あるものはその生命が授けられ、維持され、死者は太陽と共に日出のように復活するのである。このような太陽信仰は太古から至る地域で存在し、かつ長く言い伝えられてきたものである。オリエントではそのシンボルとして有翼円盤が用いられた。

どうして太陽円盤に翼がつくのかについては、皆既日食の際に現れるコロナの形に由来するという説や、天空を舞う太陽と、大空を悠々と飛翔するワシがリンクしたとする説など、様々である。表現としては、ワシの翼を用いて描写したことは確かなことのように思える。⁽⁹⁾

有翼円盤は古くは紀元前18世紀のエジプトで用いられ、ペルシアではアケメネス朝のアフラマズダ神のものが有名である。エジプトの有翼円盤は左右に長く翼が伸び、2匹のコブラが下に垂れ下がっている。コブラはホルス神の化身とされている。後期にはこの2匹のコブラは2本の脚のように描かれるようになる。類似した有翼円盤はシリアのエブラ遺跡から出土したバビロニア第一王朝期（前1700—1650年）の土器壺に押圧された印章跡にも見られる。⁽¹⁰⁾新アッシリア期では左右の翼はエジプトのものに比べ短く、丸みがある。下には鳥そのものを表現しているのであろうか、尻尾も描かれるようになる。アッシリアではさらに、神と有翼円盤を複合した表現が現れる。アッシュール（あるいはシャマシュ）神がそれで、下の尻尾が神のキルトスカートとして表現されている。館蔵品を初め、ウラルトゥに見られる有翼円盤と複合した神の表現の原形はここにある。館蔵品に描かれているティシェバが羽状装飾の衣服を着ているのもこれで理解できよう。

一口に有翼円盤と言っても、幅広い分布地域、長期に渡る使用期間を考慮に入れば、

形態にも一貫して変わらない部分と、様々なバリエーションがあることがわかる。またその有翼円盤に包含された意味内容も同様であろうことは想像に難くない。P. Calmeyer と U. Seidl が述べているように、有翼円盤を見る際、複雑に伝承されて行く過程で、いくつかの要素を兼ね備えるようになったものや、まったく別のものに変異したものなどのバリエーションを想定し、これらと一貫して太陽神を表わしているものとを区別して考えたほうが良さそうである。⁽¹¹⁾つまり、有翼円盤を支えるシヴィニが存在する一方で、有翼円盤と複合したティンシェバが存在するというように。

有翼円盤に包含された太陽神とそのバリエーションを理解する上で、役立つ興味深い資料を Calmeyer らが紹介している。⁽¹²⁾それは厚さ 0.5 mm 程度、最大径 28 cm の青銅製円形板（図 3 参照）で、周辺部に欠損部が見受けられるが、ほぼその全容はつかめる。同心円的に 4 つの円を打ち出して、5 つの区画を作り出している。文様はすべて毛彫で施されている。外周部の区画には館蔵品と類似した松笠風の連続蕾文様帯、次の区画には聖樹と人物像の間に戦車が敵兵を踏み倒しながら進む、戦闘図を連ねて描いている。地平線が上下で異なるのがウラルトゥの円形図像に見られる特徴である。次の区画は無文であるが、さらに次の区画には外周部と同様の松笠風の連続蕾文様帯が巡っている。そして中央部には山の上に立つ神が有翼円盤に身を通し、弓を手にした姿で描かれている。左右には山の上で膝を曲げた人物が一人ずつ、両翼を支えている。製作年代を推定する手懸かりは描かれている戦車の形態である。その戦車の装備はアッシュールナジルバルⅡ世（前884—858年）とサルマナッサルⅢ世（前858—824年）の時期のアッシリアの標準的な装備と一致する。6つのスポークのある車輪が用いられ、戦車胴部と轆^{ながえ}の間に柳葉形の部品が装備されているが、ウラルトゥではアルギシュティⅠ世（前785—760年）期にはすでに戦車は8本のスポークのある車輪を装備し、柳葉形の部品は見られなくなる。⁽¹³⁾したがってこの青銅製円形板はアルギシュティⅠ世期より古いことになり、⁽¹⁴⁾ウラルトゥの早期に位置付けられる。同じような青銅製円形板には、メヌア（前810—785年）やサルドルⅡ世（前760—730年）の名が刻まれたものはあるが、⁽¹⁵⁾後期の王の名は見られない。

Calmeyer らは、この周辺部に描かれている戦闘図を、アッシリアなどとの戦いにおけるウラルトゥの戦車の勝利を表現していると解釈している。ウラルトゥは前860年頃にアラム（ルティブル?）により始められたとされ、それ以降勢力は拡大し、国力は上昇過程の一途をたどり続ける。第4代王メヌア治世期がウラルトゥの歴史の中で最も輝かしいとされ、西アジアでも最大級の国家に成長している。次の第5代王アルギシュティⅠ世期も引き続き上昇過程を進む。領土拡大のために、多くの遠征を行ない、トランスコーカサスの南部が新たな領土に加えられた。この時期には文化芸術の開花もみられ、

ウラルトゥはすでにアッシリアさえものぐほどに成長していた。第6代王サルドゥルⅡ世の年代記には、アッシリアに対する軍事的成功、領土の著しい拡大、そして地中海⁽¹⁶⁾に抜ける交易路の確保等が述べられており、その繁栄ぶりがわかる。

この青銅製円形板の製作年代が前9世紀末頃から前8世紀初頭にかけてであるから、まさにウラルトゥ最盛期に作られたものであることがわかる。Calmeyer らが解釈したようにアッシリアなどとの戦闘が圧倒的勝利におわり、それを記念するものとして作られたと考えても差支あるまい。さらに Calmeyer らは次のような解釈も可能だとしている。つまりその戦闘図に囲まれるように、中央部に描かれている、有翼円盤に身を通した神は、戦闘の真只中に立っているのであるから、あるいはその神を中心に戦闘そのものが展開しているのであるから、その神こそが勝利を保証し、勝利に導く“勝利の泉”そのものであると。さてこの神は獅子の背に立っているわけでもなければ、牡牛の上になっているわけでもないの、ハルディやティシェバではない。そうなると、ヒッタイト帝国では王は自ら「我が太陽」と称したように、あるいは神ではなく王自身である可能性もあるが、神にせよ王にせよ、有翼円盤そのものに“勝利の泉”としての意味が付与されていたと考えられないだろうか。

有翼円盤は太古より、太陽神を表現してきたものであった。しかし、ウラルトゥでは太陽神シヴィニは有翼円盤を支える姿(図2参照)で描かれる。それでは太陽神シヴィニではない何かを有翼円盤が表わしているということになる。ここで筆者は太陽神とは

図2 カルミルブルール出土の青銅製ベルト (B. B. Piotrovskii, 1967)

別に、それから派生する別の一面も有翼円盤は表現するということを繰返し述べておきたいのである。つまりウラルトゥでは有翼円盤は太陽神とともに“勝利の泉”を意味する象徴でもあったのだと。

さて、館藏品に戻るのであるが、牛の背に立つティシエバは、雷神、戦いの神であり、その激しさはアダド神を通して理解できる⁽¹⁸⁾。さらにその上に“勝利の泉”である有翼円盤が重なれば、向かうところ敵なし、ということになる。雷神と有翼円盤を関連させた描写はウラルトゥが初めてではない。シリアのアハマルから出土したヒッタイト期のテシュブの石彫にはテシュブを見守るように有翼円盤が上に描かれている。思い切って重ねる描写方法はアッシリアのアッシュール神にヒントを得ているのかも知れないが、同じ雷神であるアッシリアのアダドは、印章などに描かれている姿を見るかぎり、管見では有翼円盤と複合させた例は見られない。その点でウラルトゥの独創かもしれない。そしてその独創を生み出したのが、アッシリアとの張り詰めた軍事的緊張関係であったのではないだろうか。その状況下でのウラルトゥの快進撃はティシエバと有翼円盤を重ねて余りあるものであった、ということであろう。

しかし、前745年ティグラトピレゼルⅢ世（前744—727年）がアッシリアの王位を継承した時、状況に変化が起き始める。前743年ティグラトピレゼルⅢ世は地中海に進軍し、その際サルドゥルⅡ世の軍隊と遭遇し、これを破っている。アッシリアの年代記によるとアッシリア軍は夜逃げしたサルドゥルⅡ世をウラルトゥの国境近くまで追っている。さらに前735年にはティグラトピレゼルはウラルトゥの首都ツシュブに進軍している。要塞は持ちこたえたものの、町は破壊されている。この敗北はウラルトゥの国力を弱体化させた。さらにサルゴンⅡ世（前722—705年）は前714年にウラルトゥへ遠征し、国家の中枢機関を破壊している。この遠征はアッシュール出土の粘土板に詳しく記載され、サルゴンの宮殿コルサバードのレリーフにそのエピソードが描かれている。ウラルトゥ王ルサⅠ世（前730—714年）は自らの鉄剣で自決している。ウラルトゥの衰退は誰の目にも明らかとなった。⁽¹⁹⁾

不思議にも Calmeyer らが指摘したように青銅製円形板に見られるような戦闘図は後期になると皆目見られなくなる。戦闘図に代わり、狩猟図や観闘式（パレード）図が図柄として盛んに用いられるようになる。戦闘図だけでなく、有翼円盤と複合したティシエバ像も、製作年代の推定可能な資料に限れば、ほぼ前期に限られてくる。⁽²⁰⁾⁽²¹⁾カルミルブルールより出土した前7世紀頃に製作されたと考えられる、青銅製ベルトに描かれているティシエバも有翼円盤と複合していない（図2参照）。ヴァン湖岸アディルセバツで、ルサⅡ世（前685—645年）治世期のものと考えられる、牛の背に立つティシエバの刻まれた玄武岩製レリーフが見つかったが、この例にも有翼円盤は伴っていない（図4

図3 青銅製円形板 (P. Calmeyer and U. Seidl, 1983)

⁽²²⁾ テイシェバに限らず、有翼円盤と複合させた神像は前期に多く確かめられ、有翼円盤に身を通して描かれるアッシュール神が前7世紀においても見られるアッシリアとは対照的である。馬面に限って言えば、その現象はもっと極端に表われる。拙稿でも述べたように、前9世紀末頃のウラルトッ早期の馬面には、館蔵品のように有翼円盤を伴うテイシェバを初め様々な神々、精霊や聖樹が描かれているが、それ以降めっきり装飾性は薄れ、前7世紀にもなると神像図さえ見られなくなる。⁽²³⁾ さらに、王の名が刻まれたウラルトッの金属器は公表されているもので275点現存しているが、そのうちイシュブイニが39点、メヌアが57点、アルギシュティⅠ世が21点、サルドルルⅡ世が119点と前期に圧倒的に多く、また時代が下るに連れて次第にデザインや装飾が単純化してゆく事が指摘されている。これらの事は何らかの記念として官営の工房で製造されたものが⁽²⁴⁾

図4 石彫神像 (C. A. Burney and G. R. J. Lawson, 1958)

前期に多いことを示すものであろう。⁽²⁵⁾ 前8世紀中頃を境にして、前期に比べ後期のこの節制ともいべき現象は注目すべき事柄である。

この現象がウラルトゥの上昇過程と下降過程に符号していることから、筆者はこれを国力の退化と関連づけて考えたい。前期の国力の上昇、戦闘における圧倒的勝利、そして後期の国力低下、戦闘における敗北がその時々には作られた青銅器に描かれる図像にも影響を与えたのではないかと考えられる。後期のこの禁欲的ともいえる節制は、勝利の神さえも微笑まなかったということであろう。

ま と め

天理参考館所蔵の馬面の製作年代は拙稿で述べたように、前9世紀末頃と推定されるが、神像表現から見てもウラルトゥ前期の特徴を示すことがわかった。アッシリアとの

軍事対立の最中で隆盛を極めて行く上昇期に、戦勝を祝い、記念する目的で、戦闘図や有翼円盤と複合した神像が描かれた青銅器が数多く作られたのではないだろうか。この馬面もそのような青銅器の1つと考えられる。

拙稿では前9世紀末頃から前7世紀にかけての馬面の推移、特に形態変化と装飾性の簡略化を、辟邪の役割から機能性への変化ととらえたが、ウラルトゥの場合そもそも国力の変化と関係しているのかも知れない。

比較検討可能な年代の分かるウラルトゥの資料が少ないということもあり、推測の域を出ない解釈に終わった感もあるが、先学の方々からの御教示を乞う次第である。

(謝辞)

小稿をまとめるにあたり、文献を御教示いただいた古代オリエント博物館研究員の宮下佐江子氏と仏文和訳していただいた天理参考館学芸員藤原郁代氏に対し深く感謝する。

注

- (1) 巽善信「天理参考館蔵ウラルトゥの青銅製馬面をめぐる」、『オリエント』第34巻第1号、日本オリエント学会、1991。
- (2) K. Tanabe, et al., “Studies in the Urartian Bronze Objects from Japanese Collections”, 『古代オリエント博物館紀要』第4巻、1982。
宮下佐江子「ウラルトゥ青銅製ベルトにみられる饗宴図について」、『古代オリエント博物館紀要』第5巻、1983。
- (3) 巽善信前掲(1)文献。
- (4) R. Ghirshman, “Résumés et Comptes-Rendus”, *Iranica Antiqua*, III, 1963, pp. 78-80.
- (5) B. B. Piotrovskii, *Urartu: The Kingdom of Van and its Art*, New York, 1967.
- (6) D. Collon, *First Impressions: Cylinder Seals in the Ancient Near East*, British Museum Publications, 1957.
- (7) アンドレ・パロ 『アッシリア』 新潮社、1962。
- (8) 矢島文夫 「オリエントの神々と英雄」, 『新潮古代美術1, オリエントの曙光』 新潮社、1982。
- (9) 斎藤尚生 『有翼日輪の謎——太陽磁気圏と古代日食——』 中央公論社、1982。
- (10) 今井綾子訳編 『シリアの円筒印章——発掘出土作例・様式と編年——』 言叢社、1988, 44, 45頁。
- (11) P. Calmeyer and U. Seidl, “Fine Früherartäische Siegesdarstellung”, *Anatolian Studies*, XXXIII, 1983, p. 114.
- (12) P. Calmeyer and U. Seidl, *op. cit.*

- (13) E. Özgen は弓を収納するケースと考えている。Özgen によるとこの部品はアッシリアでは前9世紀やティグラトピレゼルⅢ世治世期までの前8世紀のレリーフにしばしば描かれ、前8世紀初頭以降北シリヤ地方にも見られるようになる。Özgen の紹介したウラルトゥの資料を見るかぎり、この部品が見られるのはヴァン湖岸の石碑に刻まれたレリーフ（前9世紀末—前8世紀初頭）に描かれた馬車のみである。

E. Özgen, “The Urartian Chariot Reconsidered: I. Representational Evidence, 9th–7th Centuries B. C.”, *Anatolica*, X, 1983.

- (14) E. Özgen はウラルトゥの戦車を次のA、Bの2つに分類している。

A：6本のスポークのある車輪と長い手摺りのある細長い胴体を装備した戦車。

B：8本（例外として6本）のスポークのある車輪，上端部がカーブし，後部がやや高い胴部を装備し，側板上部後には房飾りのような形をしたつまみがある。

Özgen はA類を前期（前9—前8世紀），B類を後期（前8—前7世紀）に位置付けている。この分類では Calmeyer らが紹介した青銅製円形板に描かれている戦車は厳密にはいずれにもあてはまらなくなる。しいて言えば，6本のスポークの車輪があり，房飾り風のつまみがないことからA類に入れられよう。

E. Özgen, *op. cit.*, 1983.

- (15) E. Özgen, “The Urartian Chariot Reconsidered: II. Archaeological Evidence 9th–7th Centuries B. C.”, *Anatolica*, XI, 1984, p. 113.

- (16) B. B. Piotrovskii, *op. cit.*, pp. 1–6.

- (17) 今井綾子，前掲(10)文献。注18によると，ヒッタイト古王国創始期では王は自身を「王」と称するだけであったが，帝国成立以来，古王国と画するために王権に関する新しい概念を導入している。それはメソポタミアよりもたらされた神権的君子制である。王は最高神の地上における代行者とされ，自らを「我が太陽」と称した。

- (18) 『ギルガメシュ叙事詩』第11の書板の大洪水シーンではアダドが中心となっている。黒雲のなかでアダドは神鳴（雷）を鳴らし，多くの神々が進みでて大洪水を起こしている。矢島文夫前掲(8)文献。

- (19) B. B. Piotrovskii, *op. cit.*, pp. 6–14.

- (20) P. Calmeyer and U. Seidl, *op. cit.*, p. 114.

- (21) E. Özgen, *op. cit.*, 1984, figs. 6, 12–14, 39–41.

K. Tanabe, *op. cit.*, 1982, no. 11.

1991年にイスラエル国立博物館で世界の各地に散在している，ウラルトゥの青銅製品を集めた展覧会が開かれた。そのうち銘文が刻まれて製作年代の分かるもので，有翼円盤に身を通したティシエバ像が描かれているのはイシュブイニ（前830—810年）の名が刻まれたうちわ形軛飾，円形板，胸当，車軸飾の4点である。ただ銘文がないが，前7世紀初頭に推測されているベルト1点に有翼円盤に身を通したティシエバ像が描かれている。R. Merhav, *Urartu: A Metalworking Center in the First Millennium B. C. E.*, The Israel Museum, Jerusalem, 1991, pp. 74–76, 104,

153-154.

(22) C. A. Burney and G. R. J. Lawson, "Urartian Reliefs at Adilcevaz, on Lake Van, and a Rock Relief from the Karasu, near Birecik", *Anatolian Studies*, VIII, 1958, pp. 211-216.

(23) アッシリアに関しては前7世紀に位置づけられる印章に、さらに次の新バビロニア期の印章にも見られることから、メソポタミア地域では引き続きこの表現は用いられていたと考えられる。

B. Buchanan, *Catalogue of Ancient Near Eastern Seals in the Ashmolean Museum: Cylinder Seals*, England, 1966, p. 114, nos. 630, 631, 633, p.119, no. 667, pls. 41, 43.

(24) 巽善信「天理参考館所蔵ルリスタンの青銅製馬面」,『天理参考館報』第4号, 天理大学出版部, 1991。

(25) R. Merhav, *op. cit.*, 1991, pp. 44-48.